

志賀直哉全集

第二卷

志賀直哉全集 第二卷 第二回配本(全十五卷・付別巻)

一九七三年七月十八日 第一刷発行
一九八三年五月二十日 第二刷発行

定価三六〇〇円

著 者 志 賀 直 哉

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
番地 岩 波 書 店
電話 〇三・二六五・四二二
振替 東京六二六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

クローディアスの日記	一
正義派	二五
鵜沼行	三七
清兵衛と瓢箪	五三
出来事	六三
范の犯罪	七三
或る親子	九三
兒を盗む話	九七

寓居	一二五
小品五つ	一三五
蜻蛉	一三七
家守	一三九
宿かりの死	一四二
嵐の日	一四七
山の木と大鋸	一四九
佐々木の場合	一五五
城の崎にて	一七三
好人物の夫婦	一八三
赤西蠣太	二〇五
断片	二三一

大津順吉	二三七
和解	三二一
或る男、其姉の死	四二一

〔草稿〕

いのち〔城の崎にて〕	五三三
第三篇〔大津順吉〕	五三九
〔大津順吉〕	五七六
〔和解〕	五七七
慧子の死〔和解〕	五七八
「死ねく」〔和解 或る男、其姉の死〕	五八〇
或る男と其姉の死〔或る男、其姉の死〕	五八九
〔或る男、其姉の死〕	五九四
〔或る男、其姉の死 自轉車〕	五九五

〔初出〕

兒を盗む話〔冒頭および末尾〕……………六〇五

後記……………六〇九

クローディアスの日記

——日

彼は珍らしいいい頭をした男である。理解力も豊かだし、それに詩人だ。自分は近い内に何も彼も語り合つて彼によき味方になつて貰はねばならぬ。自分は總てを彼に打ち明けて關かまはない。然し今は其時でない。彼は今心の均衡を失つてゐる。尤もそれは自分も同じ事だ。兄の死後その妻を直ぐ妻として自らその王位に直つた、單にその生活の變化から云つても何となく自分は常と同じ調子では過かぎせない。まして久しい戀——それには殆ど望みを斷たつてゐた戀を得た喜びには自分の心の均衡を失はずにはゐられない。

自分は今、自分の此心持を出来るだけ他たに隠してゐる。それは自分が、自分の仕た事或ひは自分の此心持を恥づるからではない。只自分には自分の此心持を不愉快に思ふ人のある事が解つてゐるばかりである。解つてゐるばかりでなく、それに對しては自分は同情する事も出来るからである。

そしてさういふ人々の第一人だいいちどんは彼である。彼が近頃何となく弱つて憂鬱になつたのは見てゐても氣の毒である。のみならず彼は自分に對して或不快を感じてゐる様子だ。それにも自分は同情が出来る。自分の此柔かい心持は彼との關係では唯一の望である。自分は自分の此柔かい心持を出来るだけ大切にしなければならぬ。

自分は自分の仕た事を少しも恥ぢはしない。然し慣習からは愉快な事ではなかつたに相違ない。自分は少くとも此數箇月は喜びと苦しみとの間に彷徨してゐなければならぬだらう。

自分程外界の事情に氣分を支配される人は少ない。それを制御しようとするといつても失敗する。寧ろなるがままに任せて、その間あひだで出来るだけよく處理して行くより他ほかはないのである。

何しろ今は彼と語り合ふべき時ではない。その氣分でない。今若し話し損へば、二人は永遠に取りかへしのつかぬ關係になりかねない。

先刻さつき會つた時、妙な顔をしてゐたから「氣持が悪いのか？」と訊いて見た。それに對する彼の答へが自分には不愉快だつた。寧ろ子供らしい男である。實際子供らしい低級な惡意の示し方であつた。あの子供らしさに釣ひ込まれないだけの餘裕を常に持つてゐなければならぬ。

兎も角も、ウィッテンバーグの大學へ行く事を思ひ止とどつて呉れたのは仕合せであつた。今のままで別れて了つたら、二人の間の溝は遂に越えられない幅に擴がつて了ふだらう。

自分には彼の母が彼を愛するやうには到底愛する事は出来ない。その自分に望めないのは當然の事である。よしんば出來ても、彼もそれを其儘に受け入れられる人間ではもうない——そんな事はどうでもよ

い、二人の間では愛よりも今は理解である。そして理解し合へば其處にまた愛も湧くわけである。

——日

……………二三度呼びにやつたが遂に來なかつた。勿論今晚の酒宴は彼の爲ばかりではなかつたにしろ、隣に設けて置いた席が終りまで空いてゐるのを見ると、自分にはそれから色々な事が想はれて幾ら飲んでも氣が沈んで氣が沈んで堪へられなかつた。それを又はずませようとするポローニヤス老人の努力が尙氣を滅入らして了つた。自分はよくあの時間まであの席に堪へられたものだ。

「酒宴の習慣は守るよりは破る方がいいのだ。外國人が此國の奴を豚といふのは此習慣に溺れるからだ」こんな事を云つて友達と何處かへ出て行つたさうだ。初めて開いた今晚の酒宴を、こんな云ひ草で斷る、その禮儀のなさは眞^ま正^と面^もからは腹も立てられない。が、腹が立てられないだけそれだけ不愉快な感じは一層であつた。それも、氣分の云はせる言葉として自分は許さねばならぬ。若しかしたら父の葬式^{あま}が餘に質素だつたのが彼の感情を害してゐるかも知れぬ。

いづれにもせよ、近い内に何も彼も話し合はう。彼が生れぬ前^まから彼の母を戀してゐた事まで打ち開けて差支へない。彼にとつては不快な事に相違ない。然し或誤解をとく爲には其處まで話さねばならぬ。それも機會でいふべき事だ。機會で話さねばこんな事は半分も解らない。いい機會を待たう。

妻は何か彼に云ひ聞かす氣でゐるらしい。然し今何を云つても云ひ込められるばかりだ。彼も妻が思つてゐるよりは遙に大人である。

——日

昨夜は一と晩中、何かしら不快な心持で過ごした。どうしても寝つかれなかつた。睡くて眠る事が出来なかつた。今でもいやな心持が腹の底にをどんでゐるやうな氣がする。又頭を悪くしたのかも知れぬ。さうとも思はなかつたが近頃は何かしら絶えず考へ事をしてゐたからかも知れぬ。そんな事が自分の神経を弱らしたのだらう。然し昨晩は天候から云つても不氣味な夜であつた。烈しい風が頻りに窓を打つ。自分は飲み過ぎからツキ／＼する頭を冷やさうと、窓の扉を開けると、その瞬間に扉の合せ目からぼんやりと白く光つた小さな玉がふう／＼と闇の中に飛び去つたやうな氣がした。明るい部屋から急に闇を見たからだと思つた。

戸外の氣温は非常に寒く三十秒もさうしてはゐられなかつた。それに烈しい風が灯を消しさうにしたから、自分は扉を閉めた。其時不圖又、自分は今の光り物を見た——見たといふより感じたのだ。飛び去つた奴が又ふう／＼と飛んで来て、合せ目へ来て、其處へくつついて、此方を覗いてゐる——こんな感じがしたので。何だか凄しい氣がした。

自分は近頃、何かに呪はれてゐるといふやうな氣がする。

これは確に自分の生理狀態から來てゐるのだ。兎も角自分には仕事がある。こんな事に拘泥^{こだは}つてはゐられない。今は出掛けられないが、もう少ししたら猪狩^{ししが}りにでも行きたいと思つてゐる。

——日

今朝ボローニヤス老人が何かあわただしい用事ででもあるやうに、娘のオフィリアを彼が戀してゐるやうだと話して行つた。老人は又くどく自身が十二分^{ぶん}の警戒をしてゐるから、それに就ては心配しないでくれと云つてゐた。

彼があゝの娘を戀してゐる事は自分も感じてゐた。あの女らしい、賢い娘には自分も同情を持つてゐる。そして老人のやうに一途^{いちず}にその關係を警戒するのは自分にはいい事と思へない。今日はそれに何もいはずかつたが、正直にいへば彼が其戀を心から深く味つて呉れる事を自分は望むのである。さうすれば彼の母に對する自分の戀にも其處から多少の理解が湧いて來ねばならぬ筈である。

老人は彼の戀を割に浮いたもののやうに解^とつてゐる。それは可哀想だ。あの老人は自身酸いも甘いもすつかり噛み分けて居るといふ自信(大した根據もない)に捕はれてゐる男だ。だから、何も彼も早わかりの、早片づけをして一人で吞み込んでゐる。然し決して物の解つた人間ではない。しかも彼は此老人が考へて

るやうな淺薄な青年ではないのだ。

——冬は大概気分がいいのだが、今年は少し變だ。生活の變化がたしかに心身の調子を狂はしてゐるのだ。それにしても早く彼と理解し合はねばならないと思ふ。

善良な妻の自分に對する態度は總て生前の兄へ對してのそれである。此平和な女らしい性質を不満足に思ふのは自分が悪い。自分は妻のあの平和な性質を其儘に此家の中の調子にしたいと思ふ——近頃は切りしきにそんな事が思はれる。

今、又ポローニヤスがこんな話を持つて來た。——昨日だつたといふ。あの娘が部屋で縫物をしてゐると、帽子も被らず外套も胸は開けたまま、蒼ざめた顔つきで、入つてくると彼はいきなり娘の手頸を握つたまま長い事その顔を見詰めてゐたが、其手を軽く振つて頭を二三度上げ下げすると、深いく溜息をついて其儘物も云はずに娘の方を振りかへつたまま出て行つたといふ。老人は自身見てでもゐたやうに芝居がかりの身振りで、それを話して、で、確にそれは彼が戀故に氣が狂つた證據だといふ。が、どうも自分にはさう思へない。……然し若しかしたら何事かあつたのかも知れない。尤も一面では老人以上に芝居氣の強い男だから、その「何事か」もそれ程大した事ではないかも知れない。

——日

彼が娘にやつた手紙を見せて老人は切りに彼の病氣はどうしても戀からだといふ。尙、老人は自慢らしく娘が老人の意志通りに綺麗に彼を撥^{はね}つけた事を口巧^{くちうしや}者にしゃべり立ててゐたが、自分にはそれを其儘には承^うけ入れ兼ねる事がある。第一に彼の自分を見る眼が此二三日非常に不愉快になつた。何となく底意のあるイヤな眼だ。自分はあの呪ふやうな眼で凝^ち然と見られる時に心の自由を失ふやうな氣がする。自分是不圖、先夜屏^との隙間^{すきま}から内を窺つてゐたあの小さな光り物を憶ひ出した。

戀故に悶えてゐる者の眼では確にない。自分の觀察する所によると、彼は時々あの眼を彼の母にも向けてゐる。——邪推かも知れないが、彼の母には彼の父の死後、餘りに早く結婚した事を後悔してゐる風が見える。これが若し邪推でないとすれば、確にあの眼で毒注^さされた考である。妻は彼の狂氣が其處に原因してゐると信じてゐるらしい。この事は今の自分には堪へ難い苦痛である。

然し自分はそれで彼女を責めようとは思はない。自分は彼女の善良な弱い性質をよく知つてゐる。自分は只これを超つた情ない出来事として諦めるより仕方がない。そして自分だけで、悔ゆべき事ではないといふ最初からの考を益々堅く握りメめてゐればそれでいいのだ。

——老人は自分が老人の云ふ事を其儘に承け入れられないもので、彼と娘とを人のゐない廣間の廊下で偶然のやうに會はせて見ようと云ひ出した。立聞きは快い事ではないが、兎も角承知して置いた。

自分は今度の結婚を決して恥ぢてはゐない。少しでも恥づる心を持つてゐたら、自分の性質としてそれは到底出来る事ではない。如何に彼女を愛してゐたとはいへ、道徳的に何等の自信もなく若し結婚したのなら、自分は寧ろ無法者である。そして愚者おろかもである。然し自分には自分だけ、それに對する立派な用心意があつた。其用心意があつたから自分は寧ろ大膽に結婚を申し込み、その承諾を得て、それを直ぐ、天下に發表する事が出来たのである。そして發表する場合でも自分は却つて弱々しい感じを與へる辯解は、全くつけなかつたのである。其處に動かし難い自信を自身ですら見たやうな氣がした。然しそれには何處か弱い所があつたかも知れない。自分は自分の力を正確に計る事を誤つてゐた。今になつて見れば自分は遂に其の弱點を彼から突き込まれたのであつた。が、自分はあれ程に低級な、そして平凡な、理解も同情もない突き込み方でくる事は全く豫想しなかつた。彼の自分の行爲に對する見方は裏店うらだなに起つた或姦通事件を見るのと殆ど變つてゐない。彼は其見方に對して自ら何の疑も起さずにゐる。彼が自分等に對し、こんなに低級に解しようとは、それは自分の用心意の中にも用意されてゐない事だつた。

自分はこれに對しては何處までも戰はねばならぬ。

が、さう思ひながら、今日自分は自身の内に、猶恐ろしい弱點のある事を不圖感じた。それを今更の様